

「私の戦争体験談」

當麻 武男さん(昭和 10 年生まれ)

戦争が始まった頃は、まだ小学生くらいの時だった。

その頃は、戦争というのをよく理解していなかったが、アメリカの爆撃に備えて、防空壕を掘ったほうがいいという村の指示があったものの、当時ほとんどの家では手を付けていなかった。

ある日、アメリカの飛行機が 1 2 機くらいだったか飛来した時に、見ていたら、バラバラと爆弾が落ちてきた。みんなで「隠れろ」と声を掛けあったが、防空壕を掘っていないこともあり、隠れるどころではなかった。

東久留米駅のあたりに 1 0 数発の爆弾が落ちた。これは、田無の中島飛行場（中島航空金属田無製造所）を狙ったものだったと後から聞いた。

そのあと、私たちは急いで庭のケヤキの木の下に防空壕を掘って、爆撃に備え、夜も電灯をつけないようにしていた。夜には空襲警報があり、そのたびに何度も家族 5、6 人で命を守ることを考え、必死に防空壕に逃げ込んだことは今でも鮮明に憶えている。いつ爆弾が落ちるかが何より心配で、子供も老人もみんな一つになって耐えた。

食事は麦飯にさつまいもやとうもろこしを混ぜた、残飯のようなものだった。

学校では、みんなで仲良くしましょうというような雰囲気、先生からも戦争についての話はなかった。

1 9 4 5 年 8 月 1 5 日、学校で全校生徒が集まる中で、校長先生の「戦争が終わったんだよ」という言葉で終戦を知った。自分はよく助かった。これで一安心だと思った。

終戦後、小山地区には爆撃などの被害はなかったが、焼け出され、住む家をなくした被害家族 2・3 人を家に泊め、しばらく一緒に生活していた。

周囲にも知り合いを頼りに助け合って生活する姿が多く見られた。都営住宅が建設され、生活に苦しい人たちが住むようになった。当時は勉強よりも生活することが大事だった。みんな一生懸命助け合いながら生きていた。

令和となった今、何も知らない人が犠牲になって、物が食べられず、なぜこのようになったのかが理解できない。戦争とはなんだと改めて思う。

令和 6 年 8 月 7 日 取材